

『エルヘイム』は
ゼノイラの進行を受け
占領されてしまいました

私たちの必死の
抵抗も空しく

魔術師バルトロ率いる
部隊に劣勢に立たされ

敗北してしまったのです

「さすが巫女の妹君」

「ワシの死霊部隊相手に
ここまで戦い抜くとは」

「はあっ…はあ…」

「ぐ…っ」

「ゼー…
ゼー…」

「じゃが…ククク…」

「やはりエルフ…
良い体をしてる」

「死霊たちも貴様の体を
味わいたいと猛ってるわ」

「丁度良い」

「我々も
かなりの魔力を
消耗したのでな…」

「……っ
この生物は!!」

「足の湯き」

「貴様で満たすと
しようか!」

「体に…
絡みついて…っ!!!」

「ぎゃあああっ!!!」

突如現れた触手は
私に襲い掛かって
きました

全身に纏わりついてくる
触手たちは衣服を破り

そして――

女の聖域である
膣内へと

強引に侵入して
きたのです

「あああああああつ!!!」

アソコの肉が
裂けていく音が
全身に響き渡る

ブツン――と

「素晴らしい
素晴らしいぞ」

「膣内で貴様の
魔力の大きさが
伝わってくるとは」

「さすがはエルフの
鳥占官、どれほどの
魔力をその胎に
蓄えておるのか」

「さあ、その奥に
あるものを
もっと見せるのじゃ!!」

「あああつ!!!」
「イタ……っ
痛いっ!!」

処女肉を貫いた触手は
激しい輸送を始め

最奥にある
子宮口まで
一気に突き進んで
きたのです

「い……痛い……」
私の初めてが……
こんな……
こんな形で……

初めてを奪われた
痛みと悔しさに
瞳からは
涙が溢れてきました……

奥を突かれる度に
衝撃で視界が
明滅する

「あああつ！
やめ……この……つ」

「あああああつ！！」

私は必死に抵抗し
膣内で暴れる触手から
逃れようとするのですが

触手たちの拘束は硬く
もがけばもがくほど
膣内を犯す触手を締め付け

喜ばせるだけになって
しまったのです

「早速いただくとしようかのう」

ぐは……

突如膣を犯していた触手が
私の魔力を吸い始めて
きたのです

それは初めて味わう……
子宮に響く急激な
脱力感……「快樂」という
衝撃だったのです

「良い締め付けじゃ」

「男を喜ばせる
極上の肉壺よ」

「ビッビッ」

「……魔力が……
……吸われ……つ」

「……お……

「……お……

「もっとうじや...
もっともっと奥にある
純度の高い魔力...」

「ひぐあああああつ!!」

「その全てをよこせっ!」

「や...やめ...」

「ひっひっひ」

「やはり極上の魔力じや
触手達も喜んでおるわ!」

聞いたことがある
古代より子宮から魔力を
取り出す術は禁忌だと...

一度取り出された
魔力は

二度と...
戻ることはない

このまま
吸われ続けたら...

精霊たちの声も...
聞こえなくなつて
しまふっ!!!

そんな、そんなの耐えられない……っ!!

「いやああっ!!」

「くうう……っ!!」

「放してっ」

放しな……さいっ!!

「そん……な……っ」

力がどんどん抜けていく……振りほどけない……!!

私の、私の魔力が……こんな……っ

「ひっひっひ……気付いたか!!」

「じゃがもう遅い」

「こやつらは」

お主の魔力を、吸い尽くすまで放さんよ」

「どれ、お主にも褒美をくれで!! やろうではないか」

『死霊たちの精をな!』

「嫌っ!!」

「いやああっ!!」

「それだけは……」

それだけは

やめてえええっ!!」

「さあ受け取るがよいエルマの鳥占官よ」

「ひっ!!」

「何を……っ!!」

「ひよっとしたら孕むかもしれんのうヒッヒッヒッ!!」

精……? 孕む……?」

それって……まさか……子……種……」

触手から放たれる
死霊たちの精は：

無防備な子宮を一瞬で
満たし穢して来たのです

全身が痙攣し
目の前が明滅する

——絶頂——

私は醜い触手たち相手に
生まれて初めての絶頂を
許してしまっただけでした

そして——

再び襲い掛かってくる
触手たちは再び私の
魔力を貪り始め——

「や……もう……やめ……」

私の慟哭は神樹の森に
木魂したのでした……



神聖な神樹の足元で
犯され始めてどれくらい
経ったのか…

「ようやく終いか」

「実に芳醇な魔力
さすがは巫女の姉君と
いったところか」

「この魔力だけでも
この先数十年は困るまいで」

神樹の幹に力なく
打ち捨てられるように
倒れている私の体は

木漏れ日から差し込む光で
その姿がはっきりと確認
できるようになったのです

無残で惨めな姿

夥しい

数の凌辱の爪痕

数えきれないほどの
絶頂を味わい

触手の子種で
褐色の肌は
真っ白に
染まっていました

子宮にあった
膨大な魔力は
そのほとんどが
奪われ

代わりに満たした子種が
私のお腹を妊婦のように
膨らませていたのです

全身から魔力を全く感じない…

私のエルフとしての力は
完全に失われたのだ」と

「魔力は失ったが
苗床としての【胎】
としても十分
役に立って
もらわねばのう」

「ピ
ッピッピッ!!」
バルトロの笑い声
が聞こえる

私は意識を
手放した…